

五つの選択肢

校長 山田 浩之

令和三年度、新潟市内の学校で認知されたいじめは、千人あたり約二二三二件という報道がなされました。当校の児童数は、約五〇〇人程度。令和三年度の当校の認知件数は二二二一件の半分をやや下回りました。今年度は、昨年度の件数を上回りそうな状況です。

そのような中、児童会の生活委員会が中心となって「いじめ見逃しゼロ集会」が、全校児童を集めて行われました。集会の最初に、子ども一人一人が考える場面がありました。まずは、子ども同士が些細なことで言い合いになり大きく決裂する劇を見ます。その後、あなたがそれを見ていた友達だとしたら、次のどの行動をとるか、尋ねられます。選択肢は次の五つです。

- ① 先生に相談する。
- ② 「どうしたの？何かあった？」と聞いてみる。
- ③ すぐによびとめて話し合ってもらおう。
- ④ 心配しながらそっと見守る。
- ⑤ 友達に「二人がけんかしたの。どうしたらいいかな」と相談してみる。

この選択肢は、生活委員会の子どもたちが、どう行動するとよいのかを考えて決めたものです。この選択肢には、

子ども自身のいじめを見逃さないと
いう思いが込められています。

いじめには、いじめる側「加害者」といじめられる側「被害者」という二者関係だけでなく、いじめに加担していないけれども面白がっている「観衆」や、周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」がいる場合があります。

「傍観者」の中から勇気をふるって
いじめを抑止する「仲裁者」や、いじめを告発する「相談者」が現れること
によって、いじめを止めることができ
る可能性が高まります。選択肢の①～
⑤には、「傍観者」にならないことと
もに、「仲裁者」や「相談者」への道が
上手に示されていると思えました。

いじめの多くは、教師の見えないと
ころで行われます。ですから、周りで
見ている子どもたちの行動により、事態の
推移が大きく変わります。

そしてひとたび教師がいじめの情
報をつかむことができたなら、速やかに
関係の職員で情報が共有され、対応が
始まります。関係者から話を聞き取り、
可能な限り事実を捉えた上で、いじめ
があったと分かった場合は、確実に指
導していきます。

子どもたちは、いじめのない社会の
担い手として育っていかねければなら
りません。